

だい きやまとし たぶんかきょうせいかいぎ だい かいがいぎ るく ようやく  
第4期大和市多文化共生会議 第8回会議録(要約)

にちじ ねん がつ にち ど  
日時: 2016年11月12日(土)14:00~16:10  
ばしょ やまとし やくしよぶんちようしゃ かいがいぎしつ  
場所: 大和市役所分庁舎2階会議室  
しゅつせき いん い の みさと くす む み こ しらとりせつろう しやうじ せ やま り た の いさい  
出席: 委員(猪野美里、楠瑠美子、白鳥節郎、東海林まりえ、瀬谷麻里、田野井咲  
な ふか わたか つね やまとし こくさい だんじよきやうどうさんかかか ふなこし こうえきざいだんほうじんやまと  
奈、府川貴恒)／大和市国際・男女共同参画課(船越)／公益財団法人大和  
し こくさいかきょうかい さかい たなか こにし いしかわ いじよう めい  
市国際化協会(酒井、田中、小西、石川) 以上12名  
けっせき いん いしま いとうもとみ けい  
欠席: 委員(石間フロレデリサ、伊藤素美、ウプレティ マトリカ、ハゲイ パトリシア)(敬  
しょうりやく  
称略)

1 こうわ  
1 講話

ふじさわし がいこくじん し みんかいぎ つと ちえんそん し ふじさわし がいこく  
藤沢市外国人市民会議でコーディネーターを務める崔英善氏から藤沢市外国  
じん し みんかいぎ とく たぶんかきょうせい かつどう かか  
人市民会議での取り組み、どのように多文化共生の活動に関わるようになったかなど  
について話をうかがった。

い お がいこくじん し みんかいぎ  
言いっぱなしで終わる外国人市民会議

とうしょにほんに かんしん がなかつたが、むらかみはるき きやうみ も がい  
○当初日本には関心がなかったが、村上春樹をきっかけに興味を持つようになった。外  
こくじん にほんじん かんが かつた おも ねん たぶんかきょうせい かか  
国人と日本人には考え方のギャップがかなりあると思う。15年くらい多文化共生に関  
わっていて、まだ平行線をたどっているとの印象を持っている。

じしん「かながわ がいこくせきけんみんかいぎ」に2期 ねんさんかく  
○わたし自身「かながわ外国籍県民会議」に2期4年参画した。かながわ外国籍県民会  
ぎ まえ かわさきし がいこくじん し みんかいぎ た あ こ さがみはらし やまと  
議の前には「川崎市外国人市民会議」が立ち上がっており、その後、相模原市、大和  
し がいこくじん し みんかいぎ はじ おく ふじさわし はじ  
市でも外国人市民会議が始まり、遅れて藤沢市でも始まった。

やまとし とくちやう がいこくじん にほんじん いっしょ さんか さんかしゃ がいこく  
○大和市の特徴は外国人だけでなく、日本人も一緒に参加していること。参加者を外国  
じん げんてい かいぎ おお なか おもしろ おも  
人に限定している会議が多い中、面白いところでもあると思う。

がいこくじん し みんかいぎ ちやうさ しんぎ へ さいご ていげんないよう しゅちやう ちじ しちやう  
○外国人市民会議は調査・審議などを経て、最後に提言内容を首長(知事、市長)へ  
ていしゅつ なが がいこくせきけんみんかいぎ  
提出、という流れをとっている。とはいえ、かながわ外国籍県民会議のように10期も  
つづ おな かだい じちたい かか けん かい  
続くと同じようなテーマになってしまうという課題をどの自治体でも抱えている。県の会  
ぎ き き さい がいこくじん  
議では、1期、2期の際に「かながわ外国人すまいサポートセンター」、「MIC かながわ」  
せつりつ ていげん せさくか きいこう ていげん せさくか  
を設立するなど、提言したことが施策化されているが、3期以降は提言が施策化され  
ていない。そのため、会議に参加する外国人は「提言しても施策に結び付かない」とい  
ふまんも  
う不満を持つことになる。

じしん き かつどう おな なや かか けん ちじ ていげん なに  
○わたし自身も2期の活動をして同じ悩みを抱えた。県知事に提言しても、何もフィード  
バックがなされずに終わってしまう。活動をしたところで、外国人の暮らしや日本の多

文化共生にどのように貢献できたのか、実感もないままに会議が終わってしまう。外国人市民会議の存在意義とは何なのか。自分なりに多文化共生活動を頑張ってきたが、日本に来てから10年間取り組んできて目標を失い、その意味が何なのか、悩む時期があった。

○さがみはら国際交流ラウンジでは、外国人と日本人が一緒になって意見をぶつけあったりする。その中で、多文化共生が進まない理由は、外国人の側にも問題があるのではないかという点に気付いた。つまり、わたしたち外国人は日本語ができないから子ども問題でも何でも、日本人に何とかしてほしい、などいつも「支援してほしい」という立場に立たされている。

○入管法が改正されてから30年近く経ち、20代で来日した外国人も50代になっている。そうした自立した外国人が日本社会に貢献できる仕組みをつくっていかないといけない。トランプ大統領が誕生したアメリカやテロが発生したフランスをはじめ、外国人に仕事を奪われたなどといった外国人に対する負のイメージが世界の国々で蔓延している。外国人は負の遺産のみを残しているわけではない。しかし、外国人自身が日本社会に貢献していこうという意識が薄かったのではないかと考えるようになった。

## 藤沢での取り組み

○藤沢市外国人市民会議のコーディネーターの依頼を受け、まずは担当職員と一緒に委員の選定とその方向性を決めることになった。藤沢市では国際交流協会などの活動の歴史や拠点があまりなかったため、どういふものをつくっていけば良いのかわからない状況だった。

○外国人はグローバル化する世界で生きていくために日本語を学び、日本で仕事をしながら自立して生きていくための心得や経験値を持っている。これから日本社会がグローバル化していく中、日本社会にわたしたち外国人が経験していることを何か形として残したいと考えた。

○藤沢市の外国人の特徴は、永住者、定住者、日本人配偶者、特別永住者、留学の割合が高いこと。今後も長く藤沢市に住みたいという意思が強い方々であるとも言える。

○藤沢には多文化共生推進専門職員として勤務し、外国人市民会議のコーディネーターを務めている。役割としては、市職員とともに会議の方向性を決め、活動内容の企画、枠組み作り、委員の構成を考えること。市内の大学に会議の趣旨を説明し、参加する留学生を推薦してもらったりしている。

- 県の会議は日本語の能力を重視して委員を選んでいるが、藤沢市の場合、日本語のレベルにはばらつきがある。日本の会議、特に行政関連の会議で使われる言葉づかいは硬く、遠回しの表現が多いので、外国人がそれを理解するのはとても難しい。コーディネーターとして言葉の通訳だけでなく、内容の通訳をすることが大事なのではないかと感じている。
- 委員は10か国から19名が参加している。年4回から6回の活動があり、わたし自身は会議進行、行政と委員との調整、活動記録の作成、多文化共生関連団体とのネットワークづくりなどを行っている。
- 委員から「行政に言いっぱなしの(何も改善しない)会議はやりたくない」という不満の声を会議の立ち上げ当時に聞くこともあり、実際に委員を辞退した方もいた。それは私が10年間活動して痛感しているところでもあり、大きな課題ととらえた。一方、それを改善するためには、わたしたち外国人のことを知ってほしいと日本人にお願いするのも大事だが、同時に外国人が日本人のことを理解するのも大事だと思っている。

#### 提言とアクション

- 会議では「提言」に向けて、委員に藤沢市の多文化共生の課題をリサーチして報告してもらい、課題を共有した。次に改善点を見つけあった。「アクション活動」については、各団体と連携し、外国人市民会議を知ってもらおうと初年度は単独で実施し、2年目以降は地域の公民館(市民センター)との共催で実施した。
- 2014年度以降、本格的な活動をスタートさせた。日本に住むわたしたち外国人は母語と日本語を理解し、異なる文化に適応しようとしている。そうしたバイリンガル、バイカルチャーの文化を子どもたちに伝えたいと考えた。子どもたちにはグローバル人材として経済感覚を身につけてもらいたいと思い、世界の経済と文化を体験しようという催しものを公民館で開催した。ほかに各委員たちの文化紹介ブースを設けたりした。
- 2015年度はこれまでまとめた意見を市長へ提言したいという意見があがった。内容は(1)情報発信方法と情報の内容、(2)交流や助け合いの仕組みの2点にまとまった。藤沢市では2020年の東京オリンピックに向けて市が活発に動いている状況がある。そこで、わたしたち外国人市民もできることはないかという点を提言に盛り込んだ。アクション活動は、子ども団体とコラボして行った。演劇を通して、子どもたちに多文化共生を知ってもらおうという活動。
- 2016年度は提言の内容を話し合う場ではなく、提言した内容について市からフィードバックを受け、そのフィードバックに対してわたしたち外国人市民が何かできないか、話し合う場にした。まずは、提言内容に関連のある部署に依頼文を送り、各課から現

じょう かいぜん む どりよく すす ぶんしょ ほうこく ほうこく う  
状と改善に向けた努力をどのように進めるか文書で報告してもらい、その報告を受け  
て外国人市民会議の場で話し合った。立派な報告書になり、藤沢市も真摯に向き合  
ってくれたと思う。

- 今後、防災課と観光課と話し合いの場を持ち、行政側と市民会議側の思いが一致す  
る部分を探す。もし、市からの要請があれば、わたしたち外国人市民会議でできること  
を模索するという流れを考えている。

### 細かいルールを決める

○これからは、委員の小さい声も拾いたいと思っている。市は紙で報告書を提示するが、  
わたしたちは読めても頭には入らないと訴える委員も多く存在するので、紙ではなく、  
市ではどんな仕事をしているのか実際に現場を見たいという意見があった。そこで、職  
場を見学できるツアーを計画したらどうかという声も上がっている。わたしも経験上、外  
国人と接した市職員は心をオープンにすると感じているので、市職員と外国人市民が  
直接コミュニケーションをとれる場を設けたい。

○また、会議ではいろんな意見を活発に発言する。20名くらいもいる会議だが、会議で  
一言も意見を言わない委員をなくそう、と決めている。出席率は留学生を除けば 90%  
を超える。何かしたいと提案しても、反対する委員がいたら流れてしまう傾向があるた  
め、必ず多数決で物事を決めて、細かい意見も拾えるようにルール化している。

○また、日本語がすぐできる人とできない人がいる。修士課程、博士課程の留学生が  
すぐ難しい日本語を話す場面もあり、この会議は日本語を競い合う場ではないこと  
を説明している。100%ネイティブのように日本語ができる外国人はいない。言葉の表  
面ではなく、その人が何を言おうとしているのか、その意図をくみ取ろうと心がけており、  
その内容はルーティン化して、いつも会議の前に委員のみんなまで確認している。

○アクション活動はふじさわ国際交流フェスティバルと一緒にいった。フェスティバルに  
参加することで商工会議所や企業など市内の団体と関わりを持つことができた。

### わたしの「多文化共生」の出会いと衝撃

○来日したころは日本語がまったくわからない留学生で、渋谷の日本語学校でひらがな  
から学んだ。知り合いを頼りに相模原市に住むことになったが、矢部駅は想像以上に  
何もなかったのが当初は喪失感と失望感でいっぱいだった。なぜなら、自分が幼いこ  
ろ父親が「ブルーライトヨコハマ」をよく聞いていて、横浜がキラキラした場所というイメ  
ージだったので、隣の相模原はもっと都会だと思っていたから。毎日渋谷に通うのもた  
いへんで、日本語がまったくわからないのでパニックだった。

○ある人から相模原に無料の日本語教室があると聞いてショックを受けた。そこで初めて日本人とのつながりができた。家の中で日本の歌を聞くと、わたしは反日感情もなく育った。それでも、自分が韓国人だとわかったら、日本人からいじめられるかもしれないという恐怖心はあった。スーパーに買い物にいき、外国人であることを悟られないように黙ってお金を出したが、お金を持つ手がふるえていたことを今でも覚えている。そのくらいわたしにとって外国(日本)は未知の世界。そうした不安を取り除いてくれたのが、日本語教室の先生たちだった。

○一日8時間ぐらい勉強して、日本語能力試験1級を取ることができた。当初は大学院に行きたかったが、1級をとったことで仕事のオファーが来るようになり、さがみはら国際交流ラウンジのスタッフに応募しないかと声をかけられた。趣旨に書いてあった「多文化共生」という言葉を見つけたときは衝撃だった。当時の韓国では「多文化共生」という言葉を聞いたことはなく、「ともに生きるんだ」というフレーズがとても新鮮に映った。そのとき「私はこのために生きていこう」と素直に思い、さがみはら国際交流ラウンジの活動に取り組んでいった。

## 多文化共生への思い

○ラウンジでは、フェスティバルの時に劇を書いたり、研修会の企画をしたり、ボランティアだけ熱意があれば何でもさせてくれた。しかし10年やってみて、「本当に日本は多文化共生を進めたいと思っているのか」と疑問に思った。原点に戻り、外国人が日本人と対等になるためには、(1)自立すること、(2)貢献できる人材になることが必要だと思うようになった。

○そこで、まずはバイリンガル指導者養成講座をやることにした。市内の小中学校で韓国人の子どもを支援していたが、韓国人(外国人)であることだけで日本語をはじめ、求められている様々な支援ができるのだろうかという疑問に思っていた。教えるための教科書やマニュアル、経験もないのに、日本語ができるということだけで子どもたちに韓国語を教えなければならない。そのため、言語を指導することができるようにバイリンガル指導者養成講座が必要だと考えた。

○養成講座に関して行政機関に開催してくれるように提言したが、自分でもやってみようと思った。周りには「それはできない」とはじめてから言われた。でも自分ではできないと言われるとやってみたくなるタイプで、やってみようと思った。

○しかし、自分には専門知識が足りないことに気付いた。また、日本に来た本来の目的は大学院進学で、自分の本当の目的は「多文化共生」ではないということにも気付いた。進学してから外国人の親たちの学習団体をつくり、文化庁の「生活者としての外

外国人のための日本語教室事業から補助金が出ることがわかったので、申請した。市役所やその他の団体などにあいさつに行つて趣旨を伝え、バイリンガル指導者養成講座の開講にこぎつけた。2010年度に採択され、補助金をもらうことができた。10名ほどのスタッフを集めたものの、実施できるかどうかわからない中、何とか開催することができた。外国人指導者に身につけてほしいのは、日本語指導、教科指導、教育相談などの知識。2年かけて1回3時間、全9回の講座を2回実施した。

○開催前は10名応募があればいいかと思っていたら、60名もの応募があり驚きだった。その中で選考を行い、2010年は24名、2011年は19名選出し、合計43名で実施した。ここで、思っていたより外国人のレベルが高いということに気付いた。それはわたしだけではなく、他の受講者なども口をそろえて話していた。特にプレゼンテーションは日本人より外国人の方がうまかったので、先生たちも驚いた。今まで外国人の能力を見誤っていたのでは、との声もあった。

○東京外国語大の講座など、これまでいろいろな養成講座に出向いてネットワークを築くことができ、それが自分の役に立っている。これからは市民性を高める活動をしていきたいと思っている。

○フランス、ドイツ、アメリカ、カナダ・・・世界では外国人に対する政策が失敗していると評価される時代でもある。日本はどういう方向性にしていくのか、わたしたちの課題。藤沢市、大和市も協力して道筋を探していければと思う。IT技術の発展などでグローバル化する世界はもう後戻りすることはできないし、日本では少子化などの問題も進んでいき、自分たちの国だけでまとも暮らしていくことが難しい時代になっている。今後、一時は外国人と日本人が共に生きる多文化共生が後退する局面もあるかもしれないが、必ず反省なり、気づきがあってまた前に進んでいくものと思っている。わたしたちがどうすればいいか、一緒に考えていきたい。

○友人の言葉を紹介すると、「花束が美しいのは一緒にいるから」なんだとか。一人ひとりの力、長所を生かして一緒に美しい花束を咲かせていけるようにしたい。

しつぎ  
(質疑)

○委員：藤沢市の委員の構成は？

○講師：出身は10か国で、それ以外の国はこれから加わってもらえるように声をかけていく予定。

○委員：バイリンガル指導者養成講座の受講者はどのような方か？

○講師：主に小中学校で日本語の支援をしている方。受講者たちの支援活動は今でも続いている。教育委員会は保守的なところもあるが、どうやってうまく連携をとっていく

かが大事だと思っている。ボランティアでは限界があるので工夫していければ。

○委員：日本(外国)で生活していくコツという話があったが？

○講師：外国で暮らし始めると、はじめの半年間は幸福感があるが、その期間を過ぎるとホームシックになる、とある研究者が説明している。さびしい、つらいと感じながらも、日常生活は続けていかなければならない。そこから、日本語ができない中、周りから異文化という扱いを受けながら、自分との闘いが始まる。例えば、韓国では食器を置いて食べるが、日本人からは犬食いだと言われる。そのように、細かいところでの指摘に対して、どのように消化して、日本の文化と自分を融合させていってか考えるようになる。

外国人にはいくつかのタイプがある。本音と建前を上手に使い分け、完全に日本人化する人。また、自分のアイデンティティをうまく残しつつ、日本の文化をうまく取り入れる人。あるいは、日本に同化せず自分のアイデンティティのまま生きる人などこれまでたくさん事例を見てきた。どういう生き方がこの日本社会で自立していく上で有効なのか。日本の子どもたちがグローバル化する世界で生きていく際の心構えや乗り越えるコツなどを話し合ったりするのも面白いのではないかと思っている。

○事務局：自分ではどのタイプと思うのだろうか？

○講師：どうだろうか、他の仕事ではそうでもないのに、なぜ「多文化共生」だけはアツクになってしまうのか、自分でもよくわからない。いつも悩んだり、反省したりしている。

○委員：自分も外国で暮らしていたのでよくわかる。一緒にいる人にもよると思う。

○委員：日本での生活は母国と同じくらい長くなり、自分でもどっちなのかと迷ったりする。母国に帰って友人と話題が全然合わなかったり、考え方が全く違うなど実感することがある。

○講師：そうした場合、ショックではないが、自分が知らないうちに変化しているのであれば、その変わり様がよいものなのか、そうではないのか、立ち止まって考えるようになる。どういう風に自分がやっていけるのか。

○委員：それは仕方ない気がする。日本人に合わせているけど、〇〇人であるという自分のアイデンティティは変わらないもの。10年も暮らせば日本人っぽくなるだろう。母国に帰って「あれ、わたし日本人っぽい」と思ったり、人から思われたりするのはショックなのだろうか。

○委員：ショックは感じていないけど、変わっているのは日本(外国)で暮している自分なのか、母国で暮している友人なのか、どっちなのか考えたりする。

○委員：どう考えても、母国に帰れば変わっているのは外国(日本)に暮らす自分の方だろう。それは、いやなものなのだろうか？

○講師: いやなのではないが、違う文化の国に住んでいると困難は起きやすくなる。それでも大人は大丈夫だが、子どもは成長過程でアイデンティティの狭間でゆらいたとき、親や大人がどういうケアをするかが大事になる。そこで、わたしたち外国人が悩んだりした経験を生かすことができればいい。

○委員: 藤沢市と大和市では住んでいる外国人の属性は違うのだろうか? 日本人も同じことだと思うが、その地域に住んでいても東京などに通勤している場合は地域との関わりが少ないことが多い。

○講師: わたし自身は、藤沢とか大和とかの地域というよりも、日本全体を対象として、どのように発展させていかかといった枠組みで考えている。ただし、相模原市、大和市、藤沢市に住む外国人の属性が大きく異なるのであれば、活動の方向性を決めていく際のポイントになると思う。

## 2 意見交換

これまでの会議で出てきた主なアイデアについて、資料1の通りまとめた。そのうち、案1の「外国につながる子どもの学習支援」について、委員のみなさんからの発言を資料2にまとめた。

- |    |                 |
|----|-----------------|
| 案1 | 外国につながる子どもの学習支援 |
| 案2 | 外国人への情報提供       |
| 案3 | 外国人高齢者の居場所づくり   |
| 案4 | 外国人と地域とのつながり    |
| 案5 | 職場で日本語を学べる場づくり  |

そのほか、委員長から「外国人ボランティア活動の中心的活动場所ならびに情報発信拠点の創設」の提案もあった。

## 話し合う前に「調べる」

○事務局: これまでの会議では、いろいろな意見があった。案1～5は、「ここがダメ」という問題点を集めたものではなく、「あったらいいな」という意見をすべて集めたもの。それを踏まえて、「あったらいいな」に必要なこと、「あったらいいな」を妨げているものは何か、などについて自分たちで調べてみようと考えている。

○委員: 外国につながる子どもの学習支援に関して問題点を調べてくるのか?

○事務局: 問題点を調べるのではなく、問題点がたくさんある中、「あったらいいな」を妨げているもの、どうなったら「あったらいいな」に近づくのか、みんなで調べようということ。



しら あと なに もんだい  
調べた後に、何が問題になっているのか、どうしてできていないのかを委員のみんなではなあ話したい。

たと ほうか ご ほしゅう おも ひと た ば  
例えば、「放課後の補習クラスがあったらいいな」と思ったとき、人が足りないのか、場所がないのか、といった補習クラスの障害となる要因は何なのだろうか。最適な補習クラスとはどんな補習クラスなのか、最適になるためには何が必要なのか、などを調べた上で話し合っていきたい。

○委員：外国人に日本語を教えようというのがこの会議の委員の総意であればいいのだが、話し合うこと自体はいいと思う。ここで(外国につながる子どもの学習支援に取り組むことが)総意であると決めた方が、焦点がはっきりしているのでは？

○委員長：今日の段階で第4期で取り組む課題を決めてしまうのはまだ早いと思うが、何から取り組めばいいかもよくわからない。1～5の案はあくまでドラフト。その上で、自分たちが何をすべきか、なぜできていないのか、何が問題なのか、もう一度考えてみよう。今までは「こういう問題がある」と言いつばなしで終わっていたので、なぜできないのかももう一度考えたい。

○委員：その通りだと思う。この会議で優先的に「外国につながる子どもたちの学習支援」について取り組むことが委員みなさんの総意であれば、いいのだと思う。これ以外にも課題はあると思うが。

○事務局：今回は練習のつもり。言いつばなしではなく、何が問題になっているのか、具体的なプロセスを踏んでみたい。その練習を一度みんなでやってみる。その経験をもとにどこに課題があるのか、本当の課題は何なのか、考えてみよう。

○委員：場所の問題であればかんたんだと思う。例えば、最近大和駅近くに新しい施設ができたが、そこでできないか、とか。

(ここで資料2の通り、案1の外国につながる子どもの学習支援に関して、過去の会議における委員の発言を事務局から紹介した。)

### もんだいてん じつたい しら 問題点ではなく、実態を調べる

○事務局：プロの日本語教師が教えた方がいいのか、ボランティアがいいのか、などの意見があった。実際にわたしたちが補習クラスを実施するとなった場合、どんな補習クラスを開催すればいいのか、委員の個人的な意見ではなく、調べた上で考えてみたい。子ども自身はつまずいていることに気づいていないのではないかと思ったりする。そういう子が放課後に勉強する有効な手立ては何なのか、とかいろんな意見があるのでは。次回、みんなで調べたことを持ち寄って、その上で補習クラスのあり方を考えてみたらどうだろうか？

- 委員：どうやって調べるのか？
- 事務局：寺子屋に見学に行ったり、親や子どもたちに聞いたり…。
- 委員：実態がどうなっているのか、それをもとに話し合うべきなのでは。わたしたち一人ひとりがその実態を調査しなければいけない。
- 委員：(外国につながる子どもの学習支援について)何が問題点なのか、調べることなのか？
- 事務局：問題点ではなく、実態を調べる。例えば、寺子屋であれば、どういう子どもが勉強に来ていて、そのうち外国につながる子どもがどのくらい参加しているのか、とか。
- 委員：寺子屋に見学に行っていीいものか教えてくれれば、調べることができる。
- 委員：寺子屋であれば、教育委員会の所管になる。放課後ひろばは青少年センターに問い合わせることになる。
- 事務局：委員のみなさんで役割分担をして、調べることを割り振る。今回は、全員が案1の「外国につながる子どもの学習支援」に関して調べる。その結果を12月の会議で持ち寄ってみる。
- 委員：会議の前に提出して、委員のみなで前もって読んでおいたらどうだろうか。
- 事務局：調べることは11月30日(水)までに提出。次回の会議は12月10日(土)。
- 委員：前にも言ったが、現場を見る機会をつくってほしい。話を聞くだけではわからないので、とにかくどうやっているのか見てみたい。
- 委員：寺子屋については、退職された先生が支援しているのでは。
- 委員：柳橋小には国際教室があるため、学区外から通学する子もいる。担任の先生から放課後寺子屋に行き学習するように指示を受ける場合もあるようだ。
- (講師から一言)
- 講師：みなさんのポテンシャルが高いことは前の会議からわかっているので、何か一つでも実現につなげることができればと思う。さきほど、委員同士がペアになって見学に行く約束をしていたが、このように委員が協力していくと楽しくできると思う。

そのほか、欠席の委員にも調べることを割り振って、11月18日(金)までに全員に分担した課題を整理して送る。今後はメーリングリストを作成して情報を共有していく。

### 3 その他

次回の会議は12月10日(土)14:00～、同じ市役所分庁舎2階会議室で行う。

いじょう  
以上